『黒犬』に見る多重人格・催眠・暗示、そして志賀の人格の分裂

――【付録】麻布老婆殺し事件関係資料

細江　光

（一）多重人格・催眠・暗示と『黒犬』

『黒犬』という作品の一番の特徴は、多重人格（人格分裂）及び催眠・暗示という珍しい心理現象が扱われている点にある。

多重人格というのは、欲望の抑圧が原因で、同一人の内に、二つ以上の異なる人格が生じ、交互に出現し、通常、他の人格の時のことは互いに知らない（ただし、第二以下の人格が第一人格のしたことを知っていて、第一人格は第二人格の存在すら知らない、といったケースもある）、という病理現象である。第二以下の人格は、第一人格が否定したいと思っているような悪いことを平気で行う傾向が強く、第二以下の人格が現われる時には、声や態度なども、まるで別人のように変貌する。かつて西洋で見られた悪魔憑きや日本の狐憑きなどは、第二以下の人格が悪魔や狐と見なされたものである。『黒犬』の主人公が空想した、人を殺して置きながら、本人が全く知らないという夢遊病者のケースも、多重人格の一種である。(注1) ただし、『黒犬』の主人公は、実際には夢遊病の殺人者ではない。しかし、そうした空想に陥った際の心理が、著しく多重人格的なのである。

『黒犬』で、人格分裂がその最初の兆候を現わすのは、主人公が元の駄菓子屋の前を通り掛かって、《不図、「あの婆さんを殺した男も結局分らず了ひかな」》と思った時である。何の脈絡もなく、急にこういう疑問が浮かんで来ること自体、第一人格のコントロールをかいくぐって、下位の人格が強いた事なのである。

次いで、物取・意趣以外に《この婆さんを殺すべき動機が

（中略）あり得るであらうか？》と第一人格は考えるが、これも下位人格の罠のようなもので、この時、既に《私の腹の底には「勿論さう云ふ動機はあり得るさ」といつて居る者がある》。これは、下位人格の声がいよいよ顕在化したものである。第一人格は、《こんな事をあんまり考へると自縄自縛になるぞ》と予感するが、そういう予感を強いているのは、自分を犯人と見なしている下位人格であり、《「笑談ぢやない。自分はそんな事をした覚えはない」から云つて居るもの》は、第一人格に近いが、また別の下位人格であろう。

次に第一人格は、《浦月の話した睡中遊行者のやうな人間の仕業とすれば、それはあり得ない事ではない》と考える。これは、論理的には、自分が犯人である可能性も認めるものなのだが、第一人格自身は、その事に気付かず、自分自身が犯人であるとは、まだ全く思っていない。

すると黒犬が、《わしだけは殺した人間を知つてゐる》と話しかけて来る。これは、心理的には、主人公の第二以下の人格が、黒犬に投影された結果、黒犬が語っているように感じられるのであって、黒犬との対話は、主人公の分裂した人格同士の会話と見て良い。一般に黒いものには、自分が抑圧しているものが投影されやすいのである。第一人格は、この会話が始まる時点で、支配力を全く喪失した状態になっている。

多重人格では、下位の人格が登場する際に、第一人格とは異なる低い声を出すことが多いので、ここで、下町風の老成した「わし／お前さん」口調の黒犬と、「馬鹿いへ」「ふむ、さうだ」などと開き直った悪党じみた口調の主人公の下位人格が（恐らくは低い声で）会話する所は、声の質という点で、極めて自然であり、説得力がある。

黒犬は、老婆殺害の唯一の目撃者なので、その証言には重みがあり、読者に対してだけでなく、主人公に対しても、強い説得力を持つ。主人公は、黒犬の言うことを、自分の記憶に照らして、確かな体験的事実として一々追認・裏書きし、完全に犯人に成り切ってしまうが、それは、催眠術者が威厳ある態度を以て被験者を暗示にかけて行く〈威光暗示〉の場合と、心理的に極めて良く似ている。セルフ・コントロールの力が極度に弱まった自我状態が、こうした下位人格による自己催眠暗示を可能にしているのである。

なおまた、この時、下位人格が信じている事柄の内、殺人犯というのは誤りだが、「自分は睡中遊行者だ」という空想は、半ば当たっている。心理的にはそれに近い多重人格現象を呈しているのだから。この空想が強いリアリティーを持つ一因は、

そこにもある。

さて、主人公は、犯人に成りきった状態で、黒犬から離れて、再び家路を辿り始める。しかし、彼はそれを、老婆を殺した直後の体験と錯覚・混同する。《私は今歩いてゐる此路》を、犯行直後にも、《恰も遠い所から帰って来た人のやうな足取りで》、即ち疲労・衰弱した心神の状態で、歩いていたように錯覚する。これは、理性の働きが低下しているために、時間の感覚が混乱し、所謂既視感（déjà vu）を生じたものである。その結果、犯行当夜の状況が完全に再現されるという超自然的な怪異現象が生じているように感じられる（ただしここは、夏目漱石の『夢十夜』「第三夜」同様、怪談「こんな晩」[注二]のパターンによったものであろう）。さらに、低下した理性は、道路に落ちた二つの黒い影に、自分を殺人犯として挟み打ちにし、逮捕しようとする意志があるという超自然的怪異も、簡単に信じ込ませる。ここでは、第一人格の良心に当たる部分が、下位人格によって排除され、影に投影され、警察的な存在として感受されているのである。

《二つの影が路の上で一つになつた時》、逮捕されると思って《私は一寸息をひいた。が、其処には別に何事も起らなかつた》ので、《私は漸く、その馬鹿々々しい夢から覚めた》。この時、二つの黒い影には、主人公の分裂した人格が投影されており、それが一つに重なったことを切っ掛けに、主人公の人格も統一性を回復するという仕組みになっているのである。

妄想から覚めた主人公は、《おちものした》（これは「憑物の落ちた」の意であろう）ような気持になるが、憑物は下位人格が第一人格から支配力を奪い取る多重人格現象の一つなので、ここからも、作者がこの夜の主人公の体験を、多重人格現象と見ていたとが推測できるのである。

志賀は、こうした現象を深く理解していたようで、この夜、主人公がこのような体験をした原因について、まことに適切な伏線を敷いている。

その一つは、主人公がこの日は朝から《頭痛で甚く元気がな》く、《総て受け身な気持》だったとしたことである。普段なら、第一人格が力強くセルフ・コントロールしているのだが、心身ともにひどく弱っていた為に、コントロールが緩んで、第二以下の人格が頭をもたげて来たというのである。

もう一つの理由付けは、浦月から睡中遊行者（二重人格者）の話を聞いていた事である。《気の衰へてゐる時にかう云ふ病的な話は余りよくなかつた》と、主人公もはっきりこれを原因に挙げているように、心身の疲労時には、催眠・暗示に掛かり

やすくなる。その上、作者が設定したように、一人で暗い淋しい単調な夜道を歩くという状況は、催眠的な効果を持ちやすい。その結果、彼自身の下位人格が呼び出され、暗示がまたさらなる暗示を呼ぶような自己催眠的な状態に陥ってしまったのであろう。

作者は浦月には「恐迫観念」と説明させているが、実際にはもっと深い理解を持っていたと見て良い。

(二) 下位人格が、老婆殺し事件と結び付く理由と『黒犬』の怖さ

しかし、こうして浮かび上がって来た下位人格が、他のことではなく老婆殺しと（実際は無関係なのに）結び付くのは何故なのか。これについては、人間一般の心理に基づく理由と、志賀の個人的な理由が考えられる。

先ず人間一般の心理に関して言うと、人は誰でも、不道徳なこと・罪悪に関わること・醜悪・不潔・非人間的なことなどを、自分の人格から閉め出そうとするものである。すると、そうした要素は、下位人格の中に入り込む。だから、夢遊病状態で下位人格が解き放たれれば、人を殺すこともしかねないと誰もが感じるのである。『黒犬』を読む者が、これを他人事とは思えず、生々しい恐怖感に襲われるのは、この物語が、こうした普遍的な心理に立脚しているからである。

また、老婆殺し事件に合理的には理解しにくい要素があったことも、下位人格と結び付くもう一つの要因だったと考えられる。何故なら、第一人格は、一般に理性的で、不合理なことを排除しようとする。従って、下位人格は、非合理的な要素と結び付きやすいからである。

老婆殺しの不合理性としては、先ず物取や意趣のような合理的な動機が見当たらないことが挙げられる（モデルとなった麻布老婆殺しの方は、明らかに物取であり、動機を不明としたのは、志賀の意図的改変である。【付録】参照）。

また、黒犬が《生きたまま、檻褸布に包まれ行李詰にされて居た》ことも、犬を吠えさせない為なら、殺した方が早そうであり、不合理で不気味な印象を残す（麻布老婆殺しの方には、犬の行李詰という事実はなかった。【付録】参照）。

なお、主人公の下位人格は、自らを犯人と信じ込む訳だが、彼も自分に合理的な動機があったとは思っていない。睡中遊行者は、動機がなくても人を殺す、自分がまさにそれである、と考えているのである（実際には、後述するように、醜い老婆に対する嫌悪感が、殺害空想を呼び起こしたのであろうけれど）。

また、彼が空想した犯行の状況は、二階の窓から忍び込み、一階の老婆を絞殺した後、又二階から外へ出て行くというイメージである。入る時は、一階が戸締まりされていたためとも考えうるが、作中にはその様な合理的な理由付けは施されていない（勿論わざとであろう）。また、出て行く時に二階から出る理由はちょっと思い付けない。この様に動機もなく、方法も不合理である所に、下位人格の犯罪としての自然さがある事を、志賀はよく理解していたのである（麻布老婆殺しでは、老婆の死体は二階で発見され、一階の裏口は戸締まりされていたが、表口は開いたままだった。犯人は二階で殺害し、一階表口から逃走したと推定できる。【付録】参照）。

なお、作中の老婆殺し事件に合理的には理解しがたい点が多い事は、この作品が怪談として傑作であり、読者に強い恐怖感を与える所以でもある。およそ、怪談・怪奇小説というものは、人間の世界の合理性に対する信頼を突き崩すことで、読者に恐怖感を惹き起こすものだからである。

『黒犬』の場合は、犯行の不合理性の他に、犯人が遂に分からずじまいで終わること、老婆自身に合理的には理解しがたいような不気味さがあること、犯行の夜が完全に再現されるという怪異、二つの影が自分を挟み打ちにするという怪異、がある上に、「人間は自分をいつも合理的にコントロールできる」という信頼を打ち砕く夢遊病・多重人格という事実が突き付けられる。自分が人を殺した覚えがないという事が、殺さなかったという保証にならないことの怖さ、そして、自分が夢遊病になってしまうことや、その状態で人を殺すことを防ぐ手立てが全くないということは、底なしの穴に落ちて行くような恐怖に読者を突き落とすのである。

また、語りのテクニックという点から言うと、語り手を同時に主人公にして置いて、途中で突然自ら殺人犯と認めさせる技法が、特にショッキングである。読者というものは、本来、語り手を信頼し、その案内に身を任せることで、安心して物語の世界を辿って行くものなのである。しかるにこの語り手は、前半は基本的に客観的な、信頼できる語り手として振る舞い、浦月との遣り取りなどには、若者らしい冗談口などもまじえたりして、自分が人殺しかも知れないことなどおくびにも出さなかったのに、突然自らが犯人そのものだとはっきり認め、犯行の状況まで具体的に語り出す。しかもこの事は、この作品のテーマである二重人格の、人格交替の瞬間を、語り手が読者の目の前で実演して見せる仕掛けになっている。また、催眠術の〈威光暗示〉のようなことも、黒犬と主人公の会話によって実演して

見せているのである。

（三）志賀の人格分裂と潔癖症。『剃刀』の例

『黒犬』のような鬼気迫る傑作は、小手先の技術や、人間一般の心理についての通り一遍の理解だけで、書けるものではない。こうした作品を書いてしまうには、やはり志賀という作家に、二重人格や老婆殺しの心理に深く通じてしまうような、個人的な理由があったとしか考えられない。従って、私は、志賀にも人格の分裂傾向があったと推測する。また、特に老婆や殺人と結び付くものとしては、潔癖症と祖母へのインセスト的な性欲を原因として考えたいのである。

志賀という人は、潔癖症が激しく、自分というものを完全に理想通りにコントロールしようとし、自己の内なる偽・悪・醜、弱さ・不潔さなどの負性・劣性に対しては、それを根こそぎ徹底的に排除しようとする傾向が強い人だった（文体にも美意識にも、それが強く現われている。中でも初期には強い）。これは、遺伝的なものもあるのだろうが、祖父母のもとで、父・直温と対等のライバルのように育てられた為に生じたエディプス的な強者志向による所が大きいと考えられる。

しかし、そういうタイプの人間も、自己の内なる負の部分を本当に消去することは出来ない。だから、志賀の文学には、強者たらんとして自分の弱さに苛立ったり、出来ない事に苛立つ心理などを完全にコントロールしようとして、出来ないものが少なくないのである（『大津順吉』『和解』など）。

自己の内なる負の部分を無理に排除しようとすると、自分自身を言わば白い本当の（と思っている）立派な自分と、黒い影のようなもう一人の負の自分とに、分裂させてしまう事になる。志賀およびその文学には、実際、こういう傾向があると私は思う。そして、その為に、志賀は、二重人格の心理をよく理解できたのだと考えるのである。[注3]

回り道になるが、潔癖症ゆえに破滅する人物を描いた『剃刀』（M43／6「白樺」）を例にとって、志賀の潔癖症に対する私の解釈を、具体的に例示して見よう。

『剃刀』の芳三郎は、辰床の前の主の一人娘を貰って店も譲られたという設定になっている。即ち、彼は言わば父に取って代わった強い息子・エディプス的成功者なのである。この様な設定にしたのは、志賀自身が、父・直温との間に、激しいエディプス的葛藤を経験している長男だったからであり、その葛藤の言わば正の部分を芳三郎に投影するためである。

志賀は残りの負の部分を投影するために、黒い影のような人

物・源公を、この主人公と対をなす存在として登場させる。源公が辰床の跡目争いで芳三郎に敗れて堕落した人物、即ちエディプス的葛藤の敗北者として設定されているのはその為である。

源公は一旦は店を出たものの、再び辰床に舞い戻り、仕事は怠ける、霞町あたりの怪しげな女に狂い回る、治太公に店の金を掠めさせる、と、悪事の限りを尽くす。一般に、自己の内なる醜悪な部分を切り捨てようとする場合には、切り捨てても切り捨てても、まるで嫌がらせのようにそれが目の前に戻って来てしまう、という現象が起こる。本来自分のものであるのに、それを受け容れまいとしても、無理だからである。源公は志賀＝芳三郎が切り捨てようとする自分の半面であるが故に、一旦は店を出てもまた戻って来てしまい、芳三郎もそれを受け容れざるを得ず、店に入れると、志賀＝芳三郎の潔癖な神経を逆なでにするようなことばかりを繰り返すのである。特に源公は、エディプス的葛藤の敗北者であるから、エディプス的葛藤に本来つきまとっている性欲の暗い側面、不潔さを示すことになる。

そこで芳三郎は、遂に我慢できなくなり、事件の一月程前に、源公と治太公を追い出してしまう。しかしそれは、稼ぎ時に人手を足りなくし、風邪を押して芳三郎が仕事をしなければならなくする、という形で、芳三郎にも跳ね返って来る。自分の半面を切り捨てる事は、当然、自分の痛手になるのである。

芳三郎が殺してしまう《下司張った小男》の客は、言わば源公を追い出した結果、その代わりとして、再びつきまとって来た醜悪な自己の半面と言って良い。芳三郎はこの男を見ていると、《小女郎屋のきたない女が直ぐ眼に浮ん》でしまい、《胸のむかつくやうなシーンが後から／＼》《頭に浮んで来》てしまう。ここでも、彼が切り捨てようとする醜い性のイメージは、強迫的に戻って来てしまう。そして芳三郎は、この男の《肌理の荒い一つ／＼の毛穴に油が溜つて居るやうな顔を見て居ると》、不潔な《其部分を皮ごと削ぎ取りたいやうな気がし》てしまう。不潔な部分を全面的に切り捨てたくなるのは、潔癖症の本質的な病理だからである。そして、最後に芳三郎は、この客の顔に傷を付けてしまい、《十年間、間違ひにも客の顔に傷をつけた事がないといふ》誇りに一点のシミが印せられたことが許せず、客を殺すことで、心理的には、こうした一連の出来事すべてを切り捨てようとするのである。

芳三郎が熱に浮かされた状態で事に及ぶのは、意識的なセルフ・コントロールの力が弱まった時に、芳三郎が普段抑圧している弱い自分が出て来てしまう、ということである。

なお、性的不潔感から殺人に至る例は、『剃刀』の他に『濁

つた頭』(M44／4「白樺」、ただし夢)・『范の犯罪』(T2／10「白樺」)にも見られる。これらはいずれも、道徳的にか生理的にか不快な印象を与える人物との関係を断ち切りたいが断ち切れないという状況のもとで、潔癖症的な主人公が殺人に至っている点と、夢うつつの間に殺していること、それから恐らくは執筆時期という点で、『黒犬』と極めて近い関係にあるのである。(注6)

(四)つきまとう老婆と志賀のインセスト的欲望

『黒犬』における老婆に対する殺意も、『剃刀』と同様、醜悪な自己の一面を抹殺したいという潔癖症の衝動と理解して良いだろう。もっとも、『黒犬』の老婆を主人公が自己の醜い半面と見なさなければならないような表立った理由は、作中にはないと言って良い。しかし、『剃刀』の芳三郎に汚い性のイメージが付きまとい、悩ましたように、『黒犬』の主人公にとって、老婆のイメージが切り捨てたいのに付きまとってくるものだったという事は、明瞭に描かれているのである。

例えば、《愛嬌のない》老婆の冷たい、無関心・無表情な眼が、主人公には《甚く厭だつた》のだが、主人公は《自家からの出入りに可笑しい程それを気に》してしまう。つまり、厭なのにそのイメージに付きまとわれているのである。

また、主人公が夢現の境で見た老婆の《眼の辺から下が煮豆で一杯つまつて居る顔》。このイメージは、言わば主人公だけを狙ってその夢に入り込んで来たものであり、以後主人公に付きまとって、《覚めても不図それが浮んで来ると》《その度軽い戦慄を覚えるのが癖になつて了》うのである。

また、主人公が《或晩おそく》聞いた婆さんの《魘されてゐる気持の悪い声》と、《黒犬が吠えも唸りもせず、同じ部屋の中を亢奮しながら跳び廻つてゐる気配》。これは、他の人は聞かなかったであろうのに、まるで狙ったように、厭がっている主人公だけが聞かされてしまうのである。

《こんな風に》主人公は、《自分と直接何の関りもない婆さん》なのに、《その存在に変に拘泥し》、その末に心の奥底にかすかな殺意が芽生え、それが拡大され、自分が殺してしまったという妄想になったと考えられるのである(ちなみに、モデルとなった麻布老婆殺しの老婆は、実際には近所でも評判のお人よしの婆さんで、これらの老婆のイメージは、すべて志賀の空想か、意図的改変と考えられる。【付録】参照)。

『黒犬』の作中には、先にも述べた通り、老婆と主人公が強く結び付く理由は与えられていない。しかし、『創作餘談』に

よれば、麻布老婆殺し事件が迷宮入りした後、志賀は、自分が夢遊病者で、知らない内に老婆を絞め殺したのではないかという《変な空想にとらへられ》たことが実際にあり、『黒犬』は、それを主人公の空想に置き換えることで成立したものなのである。だとすれば、志賀には老婆殺しに生々しい実感を持つ理由があった筈である。

恐らくその理由は、志賀にとって祖母留女が実質的に母であり、その為に、父とのエディプス的葛藤の中で、祖母（老婆）に近親相姦的な願望を抱かざるを得なかったことであろう。[13]

例えば志賀には、《「沢屋の婆ァ」といふ六十以上の》《見にくいがおだやかな性質の婆ァ》に強い肉欲の衝動を抱いた体験（『濁った頭』関連草稿）や、《しみだらけな皮つきの瓢箪の肌を其儘に顔の皮膚にした》《五十ばかりのきたない婆》に対する性的な悪夢（『児を盗む話』・「ノート12」）を見た体験があった。恐らく、麻布老婆殺し（及び『黒犬』）の老婆は、志賀にとって、留女に対する禁じられた醜悪な性欲を象徴しうるものであり、だから自分が殺したという空想が浮かんだのであろう。

なお、沢屋の婆ァは、志賀のいた《離れ二階の》階下に泊まっていた。また、大正三年の大井町時代には、志賀が二階に、留女が階下に寝ていたらしい。そして、『暗夜行路』前編一の十一には、階下に寝ているお栄とのセックスを期待して、階段を降りる謙作の姿が描かれている。『黒犬』の主人公が、不自然にも《二階の窓から忍び込んで》階下に寝ていた老婆を絞め殺すのは、これらと関連するのであろう。

この観点から興味深いのは、殺された老婆について、『黒犬』では、《妾だとか、吉原の花魁上りだとか》性的に不潔な噂があった事になっている点である。この噂は、麻布の殺人事件で殺された評判の良い老婆については、多分、言われていなかったと推定できる（【付録】参照）。従って、これは留女に対する禁じられた性欲を老婆に投影するために成された作為（ないしは自然に生じた空想）であろう。

また、『黒犬』の前半に、若い主人公の性欲に絡む記述が、故意にちりばめられている事も、老婆殺害空想を性欲絡みのものにするための意図的伏線と考えられる。

例えば、主人公が《これから（中略）行つて見ないか》と言った若竹亭は、女義太夫で知られる寄席であるし、《親がかりが碁で家を空けるのは全く信用の浪費だからね》は、実際に行くならともかく、行きもしないのに遊郭へ行ったと思われるのは損だ、という意味であり、《それ程の信用でもあるまい》は、

これまでに何度も行っているから家族も信用していないだろう、の意である。また、《三島様まで送るかね》という笑談は、例えば樋口一葉の『たけくらべ』に、《坂本へ出ては用心し給へ、千住がへりの青物車にお足元あぶなし。三島様の角までは、気違ひ街道》とある吉原遊郭手前の三島神社まで送るか、の意である。上野の雁鍋辺りで《殊更景気のいい掛け声をして》主人公を《追ひ抜いて行く俥》は、吉原へ向かう人力車である。主人公の家路も、その人力車と同じく吉原方面である（恐らく千住辺りに住んでいるのだろう）[15]。また、駄菓子屋に対する主人公の羨望は、《年頃になつて茶屋待合の絃歌の響を聴きながら、其処にどんな歓楽境があるのだらうと想像した》心持になぞえられる、といった具合である。

そもそも主人公は、友人が大学生である所から、恐らくは二十余りの独身の若者であろうが、そのように設定した事も、一つには性欲にからませるため、一つには志賀の分身とするためであろう。

さらに、麻布老婆殺しは、実際には麻布で起き、志賀も麻布に住んでいたのに、『黒犬』で、舞台を吉原に程近い千住辺りに移しているのも、一つには性欲にからめるためであろう（【付録】参照）。

志賀は、吉原に近い根岸に対しても悪いイメージを持っていた。これは、根岸に志賀の実母・銀の実家・佐本家があって、留女が、下町風だった佐本家を軽蔑し、直哉に軽薄・下品な行いがある度に、「血筋は争われないものだ」と嘆息するのを常としていた事が一因である。志賀が『暗夜行路』で、謙作に悪しき性欲を遺伝させる祖父と、謙作の近親相姦的欲望の対象となるお栄を、わざわざ根岸に住まわせたのは、そういう因縁からであった。『黒犬』の老婆殺しは根岸ではないが、同じく吉原周辺で、本質的な意味は同じであろう。

ソフォクレスによれば、古代ギリシャのオイディプス王は、父ライオス王殺しの犯人を捜そうとして、自らが父を殺し、母と近親相姦を犯した犯人と知る。『黒犬』の主人公が、老婆殺しの犯人を推理しようとして、自らが殺人犯と思い込むのは、やはり、この作の根底に、エディプス的な志賀の性欲の問題が潜められているからかも知れない。

明治45年執筆の、あからさまにエディプス的な『クローディアスの日記』には、ガートルードへの恋を心に秘めているクローディアスが、兄ハムレット王の夢に魘されるのを聞いた際に、兄の夢の中でその咽を絞めている自分の形相や心持を思い浮かべる場面があるが、その表現が、『黒犬』の主人公が、老婆の

咽を絞めた《時の自身の兇悪な顔つきや様子や心持をまざ／＼と憶ひ出す》シーンと酷似しているのも、偶然とは思えない。

志賀は、六、七歳で、相馬家の屋敷内に住んでいた頃、二軒ほど置いた隣の同年配の女の子が唯一の遊び友達だった。それは、眼の悪い、声も愉快な感じのしない醜い子だったにもかかわらず、志賀はこの子をお母さんにして、情欲的な関係で遊んだと言う。其頃から多少潔癖があったにもかかわらず、キタナイ真似をする事で情欲の満足を感じようとしたと言う（『暗夜行路』草稿1・「手帳3」）。志賀がこの醜悪な黒いヒロインの誘惑を受け容れたのは、まだセルフ・コントロールが比較的弱い幼児期だったからであるが、志賀はその後ますます、負の性欲への抑圧を強め、同時に負の世界に対して、強い牽引を感じ続けていたに違いないのである。

〔注〕

（1）多重人格・夢遊病・催眠術、及び、それらが欧米の文学に与えた影響については、エレンベルガー著『無意識の発見』（弘文堂）上巻「第三章　第一次力動精神医学」を参照されたい。

（2）角川書店『日本昔話大成』11巻資料篇「昔話の型」参照。

（3）例えば、『暗夜行路』の謙作は黒い志賀であり、その実父である醜悪な祖父は、志賀の愛する祖父とは似ても似つかぬ黒い祖父として造型されている。また、お栄も、言わば黒いヒロイン、黒い留女として、謙作を悩まし続けるのである。

また、『児を盗む話』の主人公は、冒頭でいきなり父親から《貴様のやうなヤクザな奴がこの家に生れたのは何の罰かと思ふ》と、ダメ人間のレッテルを貼られてしまう黒い弱い志賀である。従って、彼は長篇小説を書こうとしても挫折し、女の子を誘拐するという犯罪を空想し始める。しかし、彼が本当に誘拐したかったのは、芝居小屋で見た、白い鳥の毛の肩掛けをした、裕福そうな家の色の白い美しい女の児なのに、実際には、貧しい按摩の家の色の黒い児を連れ出して逮捕される。つまり、ここでは、白いヒロインと黒いヒロインへの分裂があり、黒い主人公は、自分にふさわしい黒いヒロインしか手に入れられずに破滅するのである。

この他、『網走まで』の、この母は夫か《此児に何時か殺されずには居まい》と主人公に思わせた耳と鼻とに綿を詰めた男の子や、『祖母のために』の白っ児の葬儀屋、『佐々木の場合』のすが眼でひねくれた醜い賤な女の子など、負性の刻印を身に負う人物たちは、志賀の負の部分を投影された人物と見て良いだろう。

（4）『濁った頭』の津田の潔癖症は、津田がキリスト教に入信し、自慰行為を止めようとして、ナイフを腿へ突き立てたりすることや、聞き手を《貴方のやうな清浄な人》と呼ぶ所に現われている。

『范の犯罪』の范は、自分の攻撃性を一切禁圧し柔和にならねばならないと信じ込んでいるキリスト教信者の道徳的潔癖症である。その為、妻と別れられず、許そうとして追い詰められた范は、遂には妻が死ねばいいという《きたないいやな考》を抱いてしまう。范が妻を死なせたにもかかわらず興奮するのは、不潔な考えから永久に解放された事と、《何も彼も正直に云つて、それで無罪になれる》自分の純白さが、潔癖症の人間には、何よりも嬉しい事だったからである。

なお、『黒犬』は大正13年12月に完成されたが、『創作餘談』から、若い頃に一度書いたものを書き直したものであることが分かっている。明治43年8月28日の日記に〈『黒い犬』の創作を思ふ〉とあるので、初稿の成立はこれ以降であり、遅くとも大正3年中には書かれていたと推定したい。これをすぐに発表しなかったのは、所謂「時任謙作」や『暗夜行路』に組み込む可能性を考えたからかも知れない。

（5）生井知子氏の「志賀直哉と父」（「国語と国文学」H6／8）の指摘による。

（6）主人公は自宅から《坂本の闘埜》に行くのに、《未だ電車のない頃で、三の輪から》寄ったとしている事から、大正期に走っていた千住大橋・通新町・三輪橋・三輪車庫前・金杉下町・金杉上町・坂本四丁目・坂本二丁目を通る東京市電の、三輪・千住大橋間、または千住大橋から先に住んでいたと推定できる。

また、主人公は上野からの帰路、《三島神社から先》で、《根岸のやっちゃ場へ行く》《荷車に会》っているが、これは、当時千住大橋近くにあった千住市場から、下谷区笥町一～八番地、中根岸町一～四番地にあった蔬菜市場へ野菜を運ぶ荷車で、主人公は上野から千住大橋へ向かう日光街道上を歩いていると見て良いだろう。これらの点から、主人公の居住地、そして老婆殺しの現場としては、千住が最有力となる。なお、千住なら、小塚原の刑場あとや「コツ」と呼ばれる遊里もあり、老婆殺しや性欲の問題とも結び付く。

【付録】麻布老婆殺し事件関係資料

　志賀直哉は、『創作余談』で、『黒犬』は《麻布今井町の交番を一寸曲つた所に小さい駄菓子屋があつて、その独者の婆さんが殺され》、《犯人》も分からないままになっていた《或夜おそく》、志賀がその家の前を通り掛かった際に《不図此小説にあるやうな空想に陥入つた事があつたので、書いて置》き、《後年それを書き直し》たもの、と説明している。

　幸い、志賀の言う事件は、明治38年1月9日夜に起きたものと特定でき、志賀の日記と新聞に記事が残されている。以下に列挙するものがそれである（ただし、記事内容の重複する部分は省略した）。

◎明治38年1月10日の志賀日記全文。

　《鹿島の角をまがつた所に七十六七になるお婆さんが獨りで出してゐる荒物屋がムいませう——小さな——そこへ昨晩まだ宵の内強盗が這入つて其婆さんをしめ殺し金をとつたとやらで、今日は近所の巡査が気の付かなかつたのは不埒だとかで進退伺を出したとやら——それが又近所でも評判のお人よしの婆さんだつたさうですが「金故人命そこなうとは」といつた川崎屋の台辞は偽ぢやムいません、》

◎1月11日「都新聞」（三）面「●麻布の老婆殺し」と題する記事全文。

　《麻布区今井町卅四番地に荒物と駄菓子などを商ひ居れる岡本さく（七十三）と云へる独身者あり平素小金を貯め居れりと近所にても評判ありし由なるが昨朝九時頃予て近所よりおさくに頼まれ毎日の如く水を汲みに行く婆のお何が同人方に赴き見ると戸は閉めたる儘なるに何時も早起の人が今日に限つて寝坊をするとは不思議と表の戸を明けたる処締りをして無きに益々不審を起し近所の者両三人を呼び来りて家内に入り能く検め見ると裏口は堅く戸締りなしあれば座敷は銭箱やら箪笥やら右往左往に取散らしありおさくの姿が見えぬに若しや愛宕下の蝙蝠傘屋へ往きたるにはあらぬかと近所の人力車夫を頼み迎ひに遣りしが同家にも来ずとの事にて空して立帰りたり依つて更に家の中を検め見たる処這はそも如何におさくは二階座敷の隅に何者にか手拭にて絞殺され術を切つて無惨の最期を遂げ居たるにぞ一同は腰も抜けんばかりに打驚き直に麻布署へ訴へ出で同署より警部医師出張検視あり又急報に接し時を移さず東京地方裁判所より桜井予審判事長野検事、警視庁よりは宮内警部第三部の園江医師等臨検ありしが多分同家の勝手

を知りたる曲者が財宝等を得んとして忍び入りしをおさくに認められ斯る惨事を演じたるものなるべしと》

◎同日「萬朝報」(三)面「●麻布の老婆殺し」と題する記事より抜粋。

《(前略)下座敷には衣類等散乱し二階に上れば阿作の寝所にて同人は男の犢鼻褌にて絞殺され其四辺には血が流れ居る有様(中略)二階の箪笥の抽斗は悉皆開け放ちあり衣類の散乱せる等より考ふれば盗賊の所為ならん(中略)▲阿作は旧宇和島藩の奥女中を勤め同家の馬廻役岡本綱元と夫婦になりし者なるが綱元は十二年前に死亡せしより阿作は先妻の連子なる阿豊(四十四)と云へるに大塚金太郎(五十二)と云ふ綿打職人を養子に貰ひ芝区明舟町に綿店を開店せしも忽ち失敗して閉店し且つ阿作と阿豊との折合悪しく婿の金太郎はまた大の怠惰(なまけ)者三拍子揃って悪い事が重り合ひ一家に波風絶えず今より十年前金太郎を離縁せしに阿豊は金太郎と共に家出せしかば阿作は親戚なる芝区櫻川町三洋傘商山本正義等と相談の末阿豊と親娘の縁を切ってやりしに阿豊は爾来金太郎と一緒になり三年前までは芝区西久保広町に住居し居たるも目下行衛は不明なる由▲其後阿作は前記の場所に荒物商を営み所持金は銀行に預入れ其利子にて何不足なく暮し居り生来実直にして近所の評判至つてよく人より怨恨を受くるやうな事はあるまじとぞ▲また同家は二階四畳半と下座敷三畳と四畳半と都合三間にて阿作は毎夜十時前後に眠るを常とし凶行の当夜下座敷に同人が菓子袋貼りの夜業が其儘になり居たる所より察するに犯人は夜の九時前後忍入りて阿作を絞殺し死体を二階へ運び行きたるものならんと云ふ》

◎同日「読売新聞」第二版(五)面欄外「●麻布の老婆殺し(詳報)」と題する記事より抜粋。

《(前略)お作は性来至つて実直にして酒も飲まず唯だ亡夫の命日に墓参するを此上なき楽とし近所の評判も宜く(後略)》

◎翌12日「読売新聞」(三)面「●老婆絞殺の嫌疑者」と題する記事より抜粋。

《(前略)お作は元来篤実の老婆にて他人より怨を受くる筈もなく近所の者には御新造と呼ばれ敬はれ居る者(中略)其犯人は強盗の所為とも覚えず或ひは同人の財産を覗

ふ親戚故旧の毒手に出でしならんと麻布署にては厳重に探偵の末一昨夜嫌疑者として同人の親戚一人引致せられ目下取調中なり》

ただし、この嫌疑者が犯人として逮捕・処罰されたという記事はなく、容疑不充分として放免されたと推定できる。

これらの日記・新聞記事は、『創作餘談』とも『黒犬』とも大筋において一致する事から、『黒犬』のモデルがこの事件であることは、疑う余地がない。

しかし、それなら『黒犬』は、事実をそのまま書いているのかと言うと、そうではなく、以下のような相違がある。

一、『黒犬』では、老婆殺害の際、《犬は生きたまま、襤褸布に包まれ行李詰にされて居た》とあるが、日記・新聞記事には、犬のことは全く出て来ない。志賀の『創作餘談』でも、《黒犬はその婆さんの飼犬ではなかつたが、全く見分けのつかぬ位よく似たのが二匹ゐて、私が変な空想にとらへられてゐるのを二匹で見送つてゐたので、又気味が悪くなつた事を覚えてゐる。》と述べているので、行李詰の事実はなかったと見て良いだろう。

二、『黒犬』では、殺された老婆はひどく不気味で評判の悪い人物だったとしているが、志賀日記・各紙とも近所で評判の良い老婆だったとしており、こちらが事実であろう。新聞記事によれば、実際は、もと宇和島藩の奥女中で、宇和島藩士（馬廻役）の後家と言うから、比較的上品な人柄だったのであろう。

三、『黒犬』では、《物取か意趣かさへ分からなかつた》としているが、金目当てだったことは、日記・各紙とも一致している。

ただ、《箪笥の小抽斗の裏に小判が三十両隠してあつた》という『黒犬』の記述は、近所の噂か何かで聞いた話に基づいている可能性もなくはない。

四、『黒犬』では、殺人事件が千住辺りで起きたらしく書かれているが、実際は麻布で起きた。

五、『黒犬』では、時雨の降る晩秋か初冬に季節が設定されて

いる〈少なくとも夢遊病的空想においては、犯行も〈丁度こんな寒い晩〉に行われた事になっている〉が、実際の事件は、正月九日に起きた。

六、実際の事件は明治38年1月9日に起き、志賀が〈此小説にあるやうな空想に陥入つた〉のは、さらに後である。その時期は特定できないが、明治43年8月28日の志賀日記に『黒い犬』の創作を思うとあるから、この二つの日付の間のどこかであることは間違いない。

しかし、『黒犬』は、その十年余り以前に遡って時代を設定されている。即ち大正14年1月「女性」に初出の際の末尾には〈今から三十年程前の話である〉とあり、作中の〈高等中学〉という言い方から、明治27年6月、第一高等学校と改称される以前と推定したい。また、末広鉄腸の『唖之旅行』は、明治22年12月に前編、24年9月に後編が刊行されているので、明治23～6年の11月あたりが有力と考えられる。志賀は、作中に提灯・行灯・文久銭・小判三十両を使用したり、殺された老婆について、旗本の後家という噂を設定したり、物取や意趣という古風な言い回しを用いるなど、日清戦争以前という時代設定を意識していると思われる。

七、『黒犬』では、二階に寝床があり、そこで殺したように書かれているが、実際は、寝床は二階にあり、そこに死体もあった。

これらの相違点の内、最初の六点は、志賀自身の日記や『創作餘談』の事実認識ともはっきり食い違っており、意図的改変と見て良い。

時代設定を10年余り遡らせたのは、この奇怪な物語にリアリティーを持たせる為には、科学的合理的なものがまだ弱かった時期に持って行く方が良いが、睡中遊行などの心理学的説明が可能な方が都合がよいということで、明治25年頃が選ばれたのであろう。

例えば、三遊亭円朝の『真景累ヶ淵』が、文明開化の世の中では、〈狐にばかされるといふ事は有る訳のものでないから、神経病〉だということで、「真景（神経）」と名付けられたり、坪内逍遥の『小説神髄』（明治18～9年刊）で、〈稗官者流は心理学者のごとし。宜しく心理学の道理に基づき、其人物をば仮作るべきものなり〉と説かれたよ

うな時代を意識したのかも知れないが、勿論、志賀は、そうした浅薄な科学崇拝とは無縁で、浦月に《恐迫観念》という説明をさせたのも、逆に近代合理主義では説明しきれない心の不思議を強調するためであろう。

なお、先行文学作品などからの影響としては、例えば長与善郎の「心当り二三」（改造社版志賀直哉全集月報第9号　S13／6）に、志賀が28、9の頃（明治43、4年、即ち『黒犬』の最初の構想時）に、ポーの『黒猫』やモーパッサンの『オルラ』等に感心していたという証言があることが注目される。黒犬と黒猫はイメージ的に近いし、またポーの『告げ口心臓』で、老人の眼が厭で殺してしまう辺りからも、ヒントを得ている可能性がある。

『オルラ』には、夢遊病や催眠術のことが出て来るし、明治43年8月28日の日記には、有島生馬からモーパッサンの短編の話を二つばかり聞いた事と、その所為とは明記されていないが、同じ日に《『黒い犬』の創作を思ふ》という記述があり、モーパッサンの怪奇小説に触発された部分があった可能性もある（ただし『黒犬』はモーパッサンより遙かに優れている）。少なくとも志賀は、はっきり怪奇小説というジャンルを意識して『黒犬』を書いたと見るべきであろう。

この頃の志賀はまた、当時流行の催眠術を、武者たちと見に行くなど、催眠術・暗示などの心理にも関心があったようである（木下利玄日記および武者小路実篤『彼の青年時代』所収日記の明治41年11月13日。当時、催眠術が流行していた事については、一柳廣孝氏の『催眠術の日本近代』参照）。

ハーンの怪談や夏目漱石の『夢十夜』「第三夜」（明治41年7月27日「朝日新聞」）からも影響を受けた可能性がある。特に「第三夜」とは、怪談「こんな晩」のパターンという点で酷似している。しかし、「第三夜」は、百年前に犯した罪に呪われる恐怖が中心で、殺害理由は不明確だが、単なる金目当てだろう。一方、『黒犬』は、無意識の衝動をコントロールできなくなる多重人格の恐怖が中心で、性的要素も強い。また、漱石の方は被害者によって追い詰められるが、『黒犬』は、自分で追及し、自分が犯人であると思い込むという差がある。また漱石の方は、早くから結末が予感されるが、『黒犬』では、途中まで、全く展開の予想が付かない、など、違いも大きく、『黒犬』のオリジナリティーは明らかである。